

本論文は

世界経済評論 2020年7/8月号

(2020年7月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF



定期購読
期間中

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp

雑誌のオンライン書店

1960年代半ばの Redondo Beach

これを書く四月初旬、コロナウィルスに席卷されている世界の中で、アメリカの首班トランプは大統領候補時代からの「神経学的に異常な」言動をやめていない。そのため「悪質のナルシスト」「注意欠陥障害者」「癩癩持ちの赤ん坊」等々呼ばれ、混乱するホワイトハウスの暴露本も引き続き出ている。他方、こうした人間を大統領として許容する「民主制度」から、ヒットラーがワイマール共和国を乗っ取った過程を想起する歴史家も二三にとどまらない。

そうした中で、極めて小さな個人的なことを持ち出すのもナンだが、長年、思い出すごとに嘆くことがある。自分の記憶の欠如である。

白紙の試験答案

先だって、北九州の友人の有川から手紙があり、「大阪外大の数学の試験の終わった後の君の顔を思い出す」とあった。そう言ったのは、ぼくが昨年末の手紙で、大阪外大はもはや存在しないことをインターネットで知って、そう書いたことに対する返事だが、それで驚いた。

1960年の同外大の入試科目は五つあったと思うが、ぼくは数学の試験用紙を見て皆目分からず、試験が始まったばかりなのに白紙のまま提出して教室を出た。その時のことは、試験場の模様、試験官の様子など、以来ありありと覚えている。しかし試験場を出たところに有川がいたことは全く覚えていなかった。有川は中学校以来の親友だが、大阪まで「父兄同伴」よろしく、ぼくについてきてくれていたのだろうか。

このような記憶の欠如は、ぼくにはいつも起こっている。だから、そのことを気にしていたら、ぼくの人生はそれだけで埋まってしまう。

鯨に食い取られるマグロ

1966年、大阪外大を落ちて翌年行った同志社大学も大学院の二年目、アメリカの詩人 Edith Shiffert 先生が「航空運賃だけを自分で払うなら、カリフォルニアの妹のところでも二カ月過ごしていいですよ」と申し出てくださった。

妹さん Alice Boaz さんの家は LA の南端の Redondo Beach にあった。リダンド・ビーチは、いま見ると瓢箪形に南北と二つに分かれていて、ボアズ家は海辺のある南にあった。以来、避暑地、退職者の住み場所としてかなり変貌したと聞くが、1960年代半ばのころは、花咲く木のある、おっとりした田園町だった。ぼくが、『地上より永遠に』の名場面ならぬ、重なって長い接吻をする若い男女を初めて目の当たりにしたのは家のそばの浜辺だった。浜辺の歩道を esplanade と呼ぶと知って、この言葉に惚れ、そこに咲く honey-suckle の名とその香りに甘く魅了された。アリスさんの二人の孫娘 Cindy と Janet と戯れた。三つか二つの可愛い盛り。

ある時、ぼくが釣りが好きだと言ったばかりに、アリスさんの子息の Bruce さんが、夜遅く港を出て翌朝釣り場に着く船で連れて行ってくれた。近くに見える岬々とした島が Santa Catalina だったのか、その南の San Clemente だったのか、初めて飛ぶペリカンを目にし、釣りの対象の albacore の群の船の周りに集まった中を鯨が泳ぎ、釣り上げる直前に鯨に半身食い取られるのを見た。この魚は、1950年ごろ長崎は松浦の飛鳥で釣ったメバルやクサビなどだけしか知らぬぼくには思いつかない大きなもの。今みると日本名はビンナガ、小型マグロとある。

LA では何人かに紹介された。記憶に残るのは



佐藤 紘彰

三人。うち Dion O'Donnol さんは詩人だったから、シファート先生の友人だったのだろうが、残りの二人の女性は、誰が、どうして紹介してくれたのか記憶の彼方に消えてしまった。二人の一人は若い黒人で、ぼくがステーキを食べたいと言ったのだろう、料亭に連れて行ってくれたが、それだけで終わったから、若い黒人女性に紹介されたという特筆すべく点を除けば、記憶の彼方云々となっても仕方がないかもしれない。気になるのもう一人の女性である。

視野狭窄の息子さん

その人は、当時ハリウッド映画にうっとりとしていたぼくらには、アメリカ美人の典型のように思われた。すらりと背が高く、後になって考えると三十代であったのだろう、ちょっと前まで stewardess だったと言った。この言葉は 20 年以上ほど前から、flight attendant などという味も素っ気もない言葉になってしまったが、その人は戦後ビキニ姿で初めて写真を撮ったともいい、何人かの女性とのグループ写真を見せてくれた。そして、いくつかのところに連れて行ってくれた。

ある時は、友達の結婚式につれていく、と大きな自動車（詩人のオドノルさんの自動車も大きかった）に乗ったら、行先は二時間かかるという。そこでカリフォルニアを有名にした freeways を体験することになった。

また、当時、日本のぼくらが、さすがにアメリカ！ と思ったにちがいない、多くの友人を招く庭のパーティにも連れて行ってくれた。巨大なステーキを焼いて、紙の皿にとって食べる。考えてみると、以後アメリカ生活も半世紀を超えるが、あんなパーティに招かれたのは一度あったか、どうか。

この女性のアパートにも行った。寝室の、きち

んと整えたベッドに寝そべて電話をしていたが、しばらくするとワッと泣き出した。これもハリウッド映画に現れるアメリカ女性のアツケラカンそのままだった。話していたのは離婚した元の夫だったらしい。生まれた男の子は視野狭窄というのか、視界が極めて限られた形で生まれていたことが判明していた。

夏休みが終わって京都に帰ってから、その人がくれた大きな顔写真を添えてアルバムに英語の詩を書いたりした。

その後、ぼくが New York に住み始めてから連絡してきた。泊まっていた友人の友達のアパートは、当時マンハッタンのハドソン河沿いのニュージャージー側の唯一の高層ビルにあった。目の不自由な息子と一緒にだった。アパートの所有者は黒人の市役所の役人で、そのすらりと背の高い男性は脚が使えず車椅子に乗っていたが、ぼくに「アメリカの軍隊は身障者には無料で自動車運転を教える」と言ってくれ、なるほどご自身も脚をつかわないで運転できる特製自動車を使っていた。ぼくはそれにもかかわらず、ついに教えられた近くの陸軍基地に行かず、以来、夏休みになるごとにすべて妻の運転に依存しなければならない。

くだんの女性は、ほどなくブルックリンかクウィーズにアパートを見つけて、そこに一度行ったことがある。

そういう人だったのに、名前が思い出せない。こう書きながら、ふと、黒人の市役所の役人と同じく、LA でステーキを奢ってくれた女性も、この女性の紹介によるものだろうかと思うが、その人の名が出てこない。

さとう ひろあき 翻訳家、コラムニスト在 NY